

# こんな時代の ヒット力

地方空港の苦境が伝えられるなか、唯一、元気な空港として脚光を浴びているのが、石川県の「能登空港」＝写真上＝だ。国ではなく、石川県が管理・運営する空港。2000以上の滑走路が1本、東京便が1日2便（全日空）しかない小さな空港だ。同県内には、自衛隊との共用の小松空港があり、1県2空港だが、能登空港は金沢から不便な地にありながら今も60%台の高い搭乗率を維持している。その理由は何か？

同空港のPRを担当したオズ

## 能登空港



マピーアールの名和佳夫さんは、その成功法則を「能登空港モデル」として、以下の8点を挙げる。

- ①日本初の「搭乗率保証制度」。一定の搭乗率を下回れば県や地元自治体が保証金を払い、逆に目標搭乗率を超えた場合は販売促進協力金を
- ②首都圏からの誘客戦略「ぶらり能登キャンペーン」
- ③「空港の賑わい創出」。空港を地域コミュニティーの要と位置づけ、能登地方にある県の出先機関を空港ビルに集約した。また、生涯学習センターを併設してイベント会場としても活用、離着陸時以外も賑わう空港づくりを進めた
- ④空港からの交通機関として、通常料金の1割程度で利用できる予約制の乗り合いタクシー
- ⑤地元の利用促進「運賃補助制度」
- ⑥国際チャーター便の誘致
- ⑦貨物利用
- ⑧「日本航空学園の開校」。空港を利用し航空教育を行う日本航空第二高等学校と日本航空大学校を開校。教師と生徒合わせ1000人の若者がこの地域に住み着いた。そのうえで名和さんは、「なによりも県庁職員の方々が、自ら企画し、動いたことが成功要因」と指摘する。空港で配るガイドブックは、職員が直接歩きまわり取材したものだ。シーズン前には、カニのかぶり物をかぶり、報道各社や旅行代理店をまわった＝同下。県庁職員をはじめ、地元が「自分たちの空港」と思い、それを盛り上げるためにあらゆることに汗を流す。能登空港の成功は、当たり前のことを実直に行った結果だった。

### 不便な地でも高い搭乗率…そのワケは

「ふるさとタクシー」を導入した

⑤地元の利用促進「運賃補助制度」

⑥国際チャーター便の誘致

⑦貨物利用

⑧「日本航空学園の開校」。空港を利用し航空教育を行う日本航空第二高等学校と日本航空大学校を開校。教師と生徒合わせ1000人の若者がこの地域に住み着いた。そのうえで名和さんは、「なによりも県庁職員の方々が、自ら企画し、動いたことが成功要因」と指摘する。空港で配るガイドブックは、職員が直接歩きまわり取材したものだ。シーズン前には、カニのかぶり物をかぶり、報道各社や旅行代理店をまわった＝同下。県庁職員をはじめ、地元が「自分たちの空港」と思い、それを盛り上げるためにあらゆることに汗を流す。能登空港の成功は、当たり前のことを実直に行った結果だった。

(村上信夫)

協力・社団法人日本パブリックリレーションズ協会